

備陽史探訪

第38号

発行

備陽史探訪の会
福山市西深津町7-2-7
印刷所 塩出印刷

県史協の代表者会に 出席して

森 紀子

今年度の県史協の代表者会が八月八日、九日の両日、神辺で開催され

ました。今回は神辺郷土史研究会がホスト役となり、菅波会長以下、企画運営に奮闘されました。備探の会も協力するべき立場でしたが、古墳講座と重複した為ほとんど協力出来ず、福山地区の他歴史団体にお世話になりました。特に福山城博物館友の会は全面的に神辺郷土史研究会をバックアップし尽力されました。この県史協については当会員の殆どが、存在を知らされていないのが実情ではないかと思いますが、県内における歴史団体相互が情報を交換したり、地方文化の向上に寄与する事を目的として八年前に発足されています。

さて、第一日目は神辺町の史跡めぐりで、廉塾、町立歴史民俗資料館、菅茶山墓所、神辺本陣、大坊古墳、中谷庵寺跡を見学しました。案内役は以前当会員だった資料館の佐藤一夫氏です。流暢で分かりやすい説明はいつもの事ながら、安心して聴く

事が出来ました。

二日目は午前九時四十分より商工文化センターで開催行事に続き、神辺町教育委員会の平林巧氏が「神辺町における文化財保護の成果と課題」で講演されました。

神辺町は今なお、町内のどこかで埋蔵文化財の発掘調査が実施されています。しかし、原始、古代の遺物と遺跡が分離され、地域住民の為に活用されていないのが現状です。そのため神辺郷土史研究会は数年前より、備後国分寺跡、迫山古墳群、小山西池庵寺跡等を中心とした「史跡公園構想」を打ち出し、文化財を一部の人達だけのものとせず、住民全体が共有するべきものとのコンセプトのもとに行政側に働きかけをしておられます。現在各地域で「文化財保護運動と町づくり」をどう結びつけるかが懸案となっていますが、今回県史協が神辺で開催されるに当り、この点を討議のテーマとして伏線がおかれていました。それゆえに平林氏にこのテーマに添って講演を依頼し、平林氏が行政側の立場の人にも係らず問題提起されました。これによって主催者側の思惑通りに会議

が進行した事は、ひとえに菅波会長と友の会の平井会長の根回しによる尽力の賜物です。

会議ではこの他、他地区代表より地区組織の発展或いは改革等の意見が出されました。又、地域での問題点を提起し、それを県史協で集約して行政側に要望する事などが討議されました。司会の菅波会長の適切な進行で、盛況のうちに午後三時無事に閉会することが出来ました。

県史協では過去、県立博物館や県立文書館設立を県当局に要望して、それが実現の運びとなった実績があり、これからも県史協の役割は大きいものと思われまます。その為にも備探の会は加盟している意義を認識して会員に実情を知らせ、もっと積極的に係るのが得策ではないかと思えます。

芳井町取材紀行

後藤 匡史

七月五日の日曜日、朝からカンカン照りの中、備中後月郡芳井町の方へ取材に出かけた。この度の城郭研究部会の集い研究発表の為である。以前から一度行って見たいと思っていた所である。坪生から井原を通り国道三一三号線を北上すればもうそこは芳井町である。まず最初に芳井町立民俗資料館に立ち寄り入って見た。しかし日曜日なので休館であったが隣の中央公民館の女性から特別に開けてもらいごゆっくり見学し

て下さいとのその上品な感じの良い応対振りに何か今日はいいいことがあるそうと資料館を後にした。

そして芳井沢岡正靈山城跡に行ってみた。この城こそ藤井一族の旗頭・藤井能登守皓玄が居城である。しかし何分夏草の追い繁る時分、山麓をぐるりと廻り、それから藤井一門の墓のある長玄寺へ車を飛ばした。

そしてその途中郷土史家の篠原国夫氏を紹介してもらい、奥さんの出した冷たいジュースにノドをうるおしながら雑談、この時氏からガイドブックをいただき、それから長玄寺に連れて行ってもらい、そこには雪舟終とくの地と書かれた大きな碑が建っていた。

何んでもこの長玄寺と云うのは室町時代、京の都、撰関家(近衛、九条二条、一条、鷹司)筆頭の近衛家の出の千畝が室町將軍六代義教が赤松満祐に嘉吉元年(一四四一年)嘉吉の変に謀殺され八代將軍義政の願により公方祈願所として建立、又千畝和尚は広島県三原市の臨濟宗西国総本山仏通寺の住持としても有名である。又近衛家の現当主近衛文麿の次男(長男は戦死)夫婦が昭和五十八年十一月来訪、この時記念にかやの木を御手植、それから山を下り、田中有井城、藤井氏家臣の墓などを見てから氏と別れ、まだ日は高かったが帰れば今晩促進の七夕祭りにてピンナップ写真を撮りにぎやかに帰らうと思いつつ帰った。

津山下見旅行顛末記

井上

恒例、秋の一泊旅行の時が、近づいてまいりました。(ちよっと早いかなく)堤氏、吉田氏、私の三人は七月末日私の愛車に乗り、朝早くより勇み、一路旅路のスタートを切った途端に雨という幸先の悪いスタートを切った。第一の目的地、作楽神社に着く頃には雨も止んだが、前途の多難さを思わず出発であった。

まず「ここは児島高德で有名な所」と聞いても戦後の教育を受けた私には全然ピンとこない。後日「天勾踐」の句を聞いて、ようやく解するとはまだまだ歴史物の一ファンの料を出していないと痛感する。

次は鶴山城。福山城を見慣れている我々にも城石のその高さに「アッ」と声を上げる。花見時には、石垣から落ちてけがをする人もいるとか、無理もないと思う。ただ、ここも明治時代、城を売り払って石垣しかないのに、入場料を取られた。残念。

余談ながら、縁あって城のそば、鶴山塾に立寄りました。市の運営で登校許可の子らを更正している姿に同じ市の職員として感じる所もありました。

それはさておき続いては、殿様になった気分、衆楽園に、江戸時代の町人になった気分、出雲街道を廻れば、そこは、幕末の箕作阮甫宅、入場料、ただとは安い。案内のおば

あさんに、「近くの洋学資料館へ行けば」と言われ、行ってみれば、小じんまりながら、仲々の風情。とそうこうするうちに、旅館の下見に湯原方面へと向う。ストリップ劇場を横目に、ようやく決め、後は、今回のポイントの一つ、法然上人の生誕地、誕生寺へ向う。行ってびっくりここは必見、お堂のすばらしさに一同来てよかったと感じる。

◎九月例会の紹介

吹屋・成羽めぐり

九月例会は吹屋・成羽方面へ出掛ける予定となっている。吹屋方面へ行く計画が噂されて、かれこれ二年になるだろうか。然し、吹屋のメインとなる広兼邸が一般に公開され、会員の中にも希望者が多いので実行に踏み切ることになった。

吹屋は備中高梁の北に位置している。吹屋と言う地名はいつごろからついているのか不明であるが、どうも銅を吹くと言う意味からつけられたらしい。この周辺には銅をはじめとして種々の鉱山が存在し、昔からその採鉱で栄えたところである。銅については、最初、大深と言う場所

で採掘が行なわれていたが、江戸時代になって吹屋銅山が掘り始められ、

昭和初期まで採掘が行なわれていたと言う。現在、当時の面影を残す坑道が三五〇m程復元されていて往時をしのばせて呉れる。

吹屋は、また弁柄の産地としても全国に知れている。赤色弁柄は古くから陶器・漆器の着色・染料・塗料に用いられたものである。

この銅と弁柄で財をなしたのが広兼氏である。この広兼氏が江戸時代の末期に築いた豪邸が、今もそのまま偉容を誇っている。この建物は遠くから望むと黒澤明氏の映画にでも出て来そうな外容を持ち、映画「八墓村」の中にも登場する。筆で描写するより、一見してもらいたい建物である。

吹屋の街並も素晴らしい。軒を並べる弁柄の使用された民家の壁も美しい。この吹屋の街はずれに西江邸という豪邸もあるが、広兼邸と対比して見るのも面白かるう。

吹屋に行く途中、成羽の町を通る。成羽は福山藩初代藩主水野勝成ゆかりの町でもあり、倉敷美術館の有名な絵画を大原(倉紡社長)の命に应じてヨーロッパで収集し、自分も画家で知られる児島虎次郎の生誕の地としても知られている。

成羽の町でバスを降りて少し町中を散策してみたいと考えている。

十月例会

「津山への一泊のんびり例会」のご案内

十月の連休に、毎年恒例の一泊旅行を行ないます。今年は「近く、安く、のんびりと」をモットーに、津山を中心とした史蹟と、湯の郷温泉での一泊旅行をします。どうぞご参加下さい。

日時 十月十日(土)・十一日(日)
費用 男 一九、八〇〇円(予定)
女 一八、八〇〇円(予定)

定員 三十人
申込 事務局(神谷宅)に申込金
一万円を添えて、直接か郵便でお申し込み下さい。

主な見学地 誕生寺・上月城跡・妙政寺・作楽神社・津山城跡ほか予定

例会ニュース

◎九月例会 「吹屋・成羽めぐり」

期日	9月20日(日)
集合場所	福山駅前キャッスル前
集合時間	午前8時集合
会費	3,500円(会員) 4,000円(非会員)
担当者	田口義之・神和孝
注意事項	① 雨天決行 ② 道路の都合で、申し込みは早目に。 ③ 食事は吹屋の街で自由時間とをりまわすので、食堂で吹屋の郷土料理をいただきます。